優良農家紹介

糞尿処理は集落営農組織と手を組んで

加古川市では都市化が進み畜産経営の存続が困難になっており、とりわけ糞尿処理には苦慮している。

以前、酪農家は個々に堆肥散布を行い、なんとか処理していた。しかし個人的な繋がりでの散布は、農地の宅地化や耕種農家の高齢化、意欲低下などで場所の確保が困難になってきた。そこで酪農家は営農組合との共同事業として堆肥散布システムを確立し、自らの経営環境の改善と土づくりによる地域農業振興に取り組んでいる。

1 組織の概要

名　　称　加古川市土づくり組合
参加戸数　酪農家4戸
飼育頭数　乳用牛136頭
所有機械　ホイルローダー　1台
（マニュアスプレッダー、フロントローダーは個人有機械を借り上げ使用）

2 取り組みの経緯

加古川市土づくり組合は平成3年に結成された。きっかけは、ほ場整備を契機に営農組織作りを進めていた市内の集落が、土づくりを計画し、堆肥を供給してくれる相手を捜していた。その動きに加古川市東部酪農組合の有志が即応し、土づくり組合の結成となった。

3 取り組みの特色

(1) 窓口は農協

散布の条件は営農組合を対象に1ha以上の団地としている。営農組合が対象のため農協が窓口となり受付事務等を担当している。

散布料金は6,000円／10a（堆肥3～4t含む）で、比較的安く設定している、立派な堆肥施設や機械を持たず堆肥製造に余計な金と労力をかけていない。

(2) 営農組合との共同

営農組合と共同で作業するため、営農組合のオペレーター確保と悪臭防止への配慮から短期集中的に作業を行う必要がある。そのため土づくり組合と営農組合は、事前に打ち合わせを行い作業計画をたて、作業終了まで連携をしながら作業をすすめる。

(3) 連携プレーでスムーズな作業

土づくり組合は事前に堆肥をほ場へ搬入しておき散布に備える。作業2人組2班で、マニュアスプレッダーをフロントローダーで追いかけて堆肥を積み込みながら散布する。散布が終了すると営農組合のオペレーターがすぐに堆肥を鋤込んでしまう。こうした連携プレーで1日約3ha、面積の多い集落で5日、少ない集落は1日で作業が終了し、堆肥散布による悪臭の苦情等もでない。

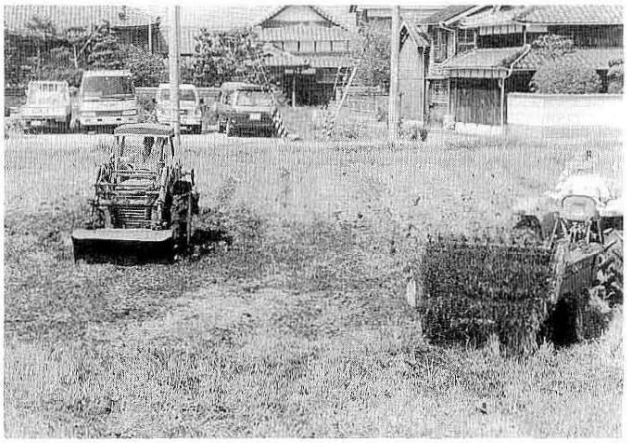
(4) 作業時期の分散

現在4集落、約30haの農地に散布を行っている。内3集落は、小麦、レンゲ跡の夏期に散布、残り1集落は、大豆跡の冬期に散布を行って、労働の分散や堆肥のスムーズな流通を図っている。

4 地域農業振興と今後の方向

加古川市ではこの堆肥散布の定着を見て、堆肥施用を栽培条件としたブランド米「鹿児の華米」の生産振興を平成9年度から開始した。土づくり組合も全面的に協力しているが、堆肥が足りなくなってきた。そこで不足分は市内の肉牛農家に依頼し供給してもらっている。今後、農協の広域化が予想されるため近隣市町の畜産農家ともネットワークを作り、安定的な広域堆肥流通システムの構築を検討している。

佐藤　吉昭（加古川普及センター）



チームプレーで機械を休ませない